

初期マルクスにおける労働価値論の受容について

大澤 健

1. はじめに

筆者は以前の拙稿¹⁾において、マルクスが彼の経済学研究の初期段階で労働価値論を拒否した理由について考察を行った。本稿は直接にその続きであり、1840年代後半に彼が一転して労働価値論を受容するに至った理由と経過について考察を行う。

初期マルクスにおける労働価値論の拒否から受容への転回は、彼の労働価値論の形成過程における非常に大きなトピックである。後年労働価値論を厳密に用いた経済学体系を構築するマルクスが、「一八四四年の経済学・哲学手稿」(以下、『経哲草稿』と略記)および「J.ミルに関するノート」(いわゆる「ミル評注」)などを含む『パリ・ノート』段階では労働価値論を受容していなかった理由については様々な考察が行われてきた。

多くの場合この転回は、当初古典派経済学の理論的正当性を評価できなかったマルクスが、本格的に経済学を学んだ結果としてその理論の正しさを認識して摂取した、と理解される。しかし、こうした単純な受容の過程として理解することには多くの問題があることをすでに前稿で述べた。『経哲草稿』では、「国民経済学」が、「富の主体的本質」としての労働を発見したことを「開明的」²⁾であると高く評価し、この草稿自体もこうした「国民経済学の諸前提から出発」³⁾することで書かれている。私的所有の主体的本質を労働とした古典派の労働価値論をこの段階ですでに高く評価しながら、これを自らの論として採用しなかった理由が「未精通→精通」解釈では明確にはならない。むしろ、人間の本質は労働にあるという認識に到達していたのだから、労働価値論を積極的に採用するだけの十分な根拠があったし、採用すべきだったとも考えられる。

それゆえ、労働価値論の拒否から受容への転回は、古典派経済学に対する未精通から精通へという単線的な変化によって生じたのではなく、マルクス独自の問題意識の発展とそれにとまなう社会認識の方法の深化によってもたらされたと理解する必要がある、というのが筆者の基本的な立場である。

1) 大澤健 [2014]

2) カール・マルクス「一八四四年の経済学・哲学手稿」(以下、『経哲草稿』と略記)『マルクス・エンゲルス全集』第40巻 大月書店 P.451, MEGA Band I /2 S.383

3) 同上, P.430, S.363

前稿で推論した通り、経済学に接したばかりの『経哲草稿』段階のマルクスが労働価値論を拒否した理由は、フォイエルバッハが宗教批判のフレームとして用いた「疎外論」的社会把握の方法を自らの社会把握に援用したことにある。ドイツ哲学の徒として出発したマルクスは、その巨星であるヘーゲルにたいするフォイエルバッハのラディカルな批判を高く評価していた。それゆえ、思弁的で観念的なヘーゲル哲学を現実の人間から批判する方法としてフォイエルバッハが用いた「疎外」論を、マルクス自身が自らの市民社会分析の方法として生かそうとしたことは十分に根拠のあることだった。これが『経哲草稿』における「疎外された労働」である。

しかし、こうした疎外論を用いた社会把握を用いることによって、貨幣、価値、交換という現実の社会的関係、さらに言えばそこに示される人間相互の社会的な性格を上手く把握できないという決定的な困難を抱えることになった。この困難が端的に表れているのが、「ミル評注」における交換の分析であることもまた前稿で考察をした。

それゆえ、マルクスが労働価値論の拒否から受容へと転回していく過程は、フォイエルバッハ的な疎外論を批判的に克服していく過程と並行して進んでいくことになる。「ミル評注」段階でマルクスが直面した困難を契機として、「フォイエルバッハにかんするテーゼ」から『ドイツ・イデオロギー』段階でマルクスは「疎外論」的社会把握の方法を批判的に克服していく。マルクスの社会把握の方法が発展的に変化していくことによって「史的唯物論」という彼独自の社会認識の方法が確立されることになった。史的唯物論は、天啓のようにある日突然マルクスの頭脳に飛来したわけではない。それは、古典派経済学に出会う前から続く初期マルクスの社会把握の方法の複線的な発展過程の結果として形成されたのである。

そして、この「史的唯物論」の確立というマルクスにとって決定的な社会認識的方法的深化が労働価値論の受容の直接的な契機になっている。マルクスが労働価値論を受容したことが明確に確認できるのは、1847年の著作である『哲学の貧困』とされる。労働価値論を拒否していた『経哲草稿』や「ミル評注」段階と、『哲学の貧困』段階との間には、『ドイツ・イデオロギー』およびそこでの唯物史観の確立が存在している。それゆえ、状況証拠的には唯物史観の成立が何らかの意味で労働価値論の受容に影響を与えていることがこれまでも指摘されてきた。実際、『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクス自身の社会認識上の大きな変化によって労働価値論を受容するための理論的な土台が形作られている。すなわち、マルクスによる労働価値論の受容は、古典派の理論に対する未精通から精通によって生じた単純な受容なのではなく、彼独自の社会認識の方法である史的唯物論の成立過程と相即的に進むのであり、両者は理論的に表裏一体の関係を持っている。

本稿は、まず「疎外論」によって市民社会を把握することの困難さをマルクスが認識したことが、唯物史観の形成に直接つながっていくことを示す。困難の克服において生じた決定的な変化は、人間の「類の本質」としての労働概念を社会的な概念として把握しなおすことにあつ

た。社会的関係の中で铸なおされた労働概念が「生産力」である。そして、市民社会における人間相互の関係を把握するための「紐帯」についての考察が、「生産関係」として貨幣・商品交換として位置付けられる。「生産力」と「生産関係」という両者の相互関係によって社会的関係を把握するという周知の唯物史観の基本的な構造がここに形成されることになる。

そして次に、こうした史的唯物論が形成されること労働価値論の受容につながっていくことを明らかにする。人間の社会的な本質概念である労働が「生産力」であり、その市民社会的な「生産関係」としての表現が価値・貨幣であるという論理によって、労働と価値は結びつくことができた。そして、唯物史観の確立によってマルクスが労働価値論を採用したという事実から、彼の労働価値論は、彼の独自の社会観である史的唯物論を理論的な土台として展開されている点で、古典派的労働価値論とは決定的に異なる理論的な含意があると考えられる必要があることを最後に述べる。

2. これまでの考察から

筆者は以前の拙稿⁴⁾において、労働価値論に接する以前のマルクスの問題意識と、社会把握の方法がどのような過程をたどって成長してきたのかを考察した。その際に、初期マルクスの社会認識の形成過程は、人間の普遍的①「本質」とその②「実現」（あるいは「解放」）、さらにそうした本質に対する③「市民社会」の現状把握と、この社会において人々を結びつけている④「紐帯」という4つの思考軸を中心として展開されていることを指摘した。これらは相互に絡み合いながら、ひとつの概念についての変化が玉突き的に他の変化を促すという形で、相即的にマルクスの社会認識の方法を発展させている。古典派経済学、あるいは労働価値論に接する以前にマルクスの社会認識はこのような経過を経て形作られており、これが彼の労働価値論形成過程の前史となっていた。

1844年の『経哲草稿』において、マルクスは「現世の問題」である市民社会のあり方を解明する学問としての古典派経済学の研究を本格的に開始することになる。この段階でマルクスが出会った労働価値論も、本格的な経済学研究を開始する以前に彼自身の論として形成されていた社会認識の方法の上に位置付けられることになる。

『経哲草稿』に先行する諸著作から確認しておくべき重要な点は、マルクスの労働価値論は、労働論、あるいは価値論として形成されてきたわけではないということである。先行段階において形成されていた「本質論」の延長線上に「労働」の考察に至るのであり、そして「紐帯論」の延長線上に「(交換) 価値」および「貨幣」の考察が位置付けられることになる。『経哲草稿』段階での労働価値論の拒否は、このような経路をたどりながら発展途上にあった当時のマルク

4) 大澤健〔2003〕

スの自身の社会認識の方法に規定されている。

先の4つの軸の中で、1844年の段階で生じた大きな進展として確認できるのは人間の本質を「労働」として明確化した点にある。すでにマルクスは『ユダヤ人問題によせて』において、「理性」や「自由」を人間の本質とする観念論的把握から脱却して、現実の生活の次元における人間から把握するという唯物論的認識に大きく踏み出している。『経哲草稿』段階では、「労働」こそが人間の主体的な本質であるという認識が明確化された。「人間の本質」としての「労働」という考え方は、『経哲草稿』第一草稿における〔疎外された労働〕の部分で繰り返し述べられている。

こうした「類的本質」としての労働概念の認識を基点としてマルクスは現実の市民社会の考察に取り掛かることになる。その際に、方法的枠組みとして採用したのは、フォイエルバッハの影響を強く受けた「疎外論」的的社会認識であった。エンゲルスの『経済学批判大綱』に刺激されて国民経済学の本格的研究に着手したマルクスだったが、もともとヘーゲル学徒であった彼は、すでに『ユダヤ人問題によせて』の段階で疎外論を用いて現実の市民社会の分析⁵⁾に着手していた。そんな彼にとって、自らの慣れ親しんだ社会認識の方法である「疎外」を使うことで、人間の類的本質としての「労働」から私的所有の本源的な意味を措定し、国民経済学的事実をさらに深い次元で批判的に把握し直すことができると考えたことは十分に根拠のあることだった。実際にマルクスはそうしたのであり、私的所有を「疎外された労働」とすることで国民経済学批判を詳細に展開している。

最初期から続くマルクスの思想的な変化を図にまとめたものを以下に再掲する(図1)。

「疎外論」的的社会認識を用いた結果として、1844年時点のマルクスは必然的に労働価値論を拒否せざるをえなかった。というのも、フォイエルバッハ的な意味での「疎外」という認識のフレームを用いるならば、市民社会における人間はその本質である労働を私的所有として疎外しているのだから、現実の人間どうしの間には「労働」という本質的な契機はもはや残されていないからである。「疎外」によって、人間の本性は疎外された側に移譲され、現実の人間はその本性である労働から文字通り「疎外」されることになる。

フォイエルバッハは言う。「人間はキリスト教においてもっぱら自分自身に集中させ、自分を世界全体の連関から引き離し、自分を自分自身に満足している全体にし、世界の外にあり且つ世界を超越している絶対的存在者にした。人間は自分をもはや世界に所属する存在者とみなさず、世界との関連を中断した。」⁶⁾

5) ただし、『ユダヤ人問題によせて』段階では、疎外されたものとして考察されているのは、「貨幣」である。『経哲草稿』段階で、疎外されたものとして措定されるのは「私的所有」であるが、この「深化」が「私的所有」と「貨幣」の関係の解明という新たな問題を「ミル評注」において提起することになる点については前拙稿〔2014〕を参照。

6) L. フォイエルバッハ〔1975〕P.270

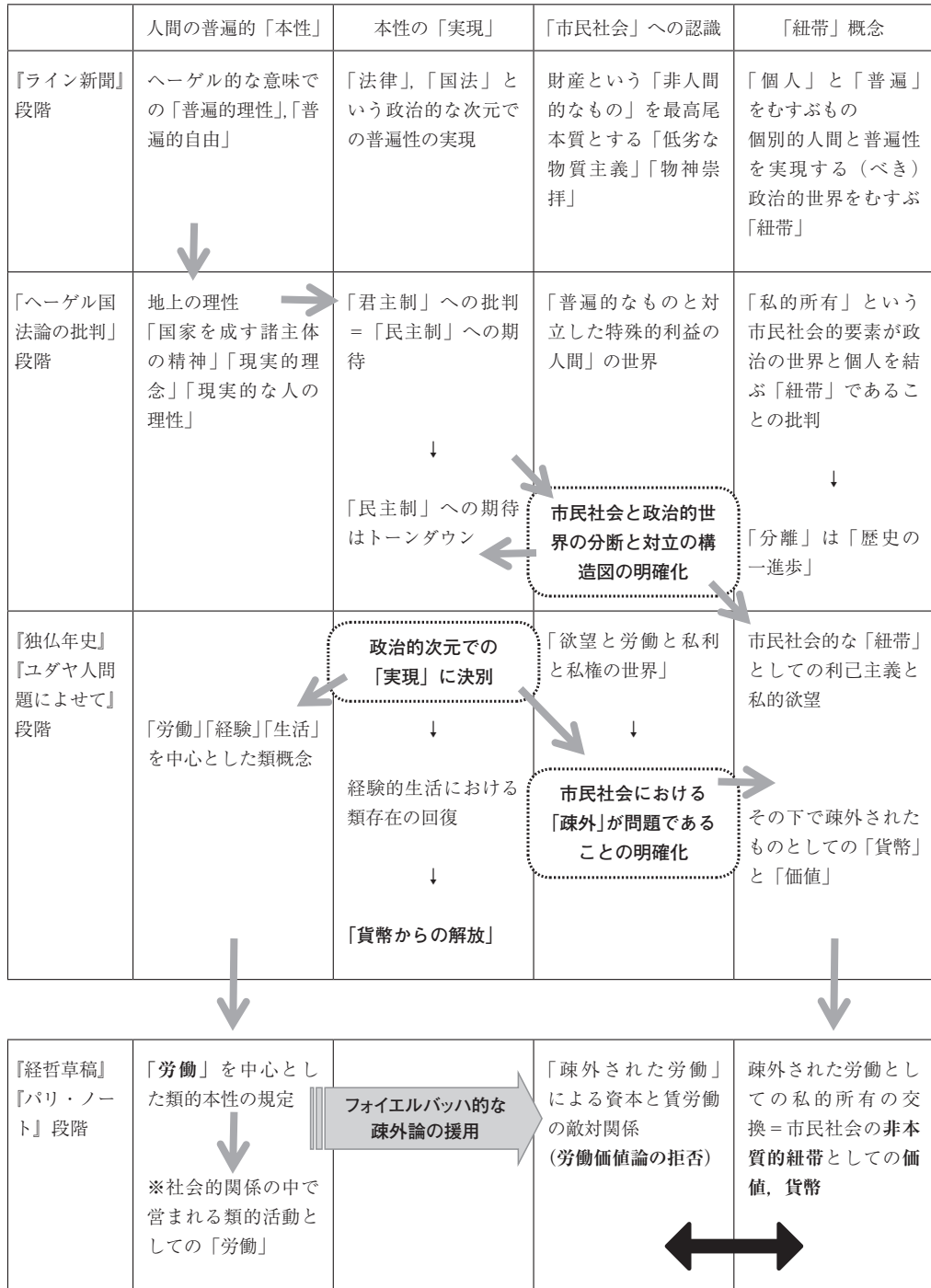


図 1. 『経哲草稿』までのマルクスの社会把握の方法の変化

こうしたフォイエルバッハの疎外論をそのまま私的所有の世界に適用するならば、現実の人間と人間の社会的関係の内部には、「労働」という人間の本質的な契機は含まれないことになる。人間の本質である労働がもはや私的所有として疎外されているのだから、人間相互の間には「労働」という本質的な紐帯はなんら存在していない。それゆえマルクスは、労働という類的本質を私的所有の本質として「発見」した古典派経済学を高く評価しながらも、あるいはむしろ高く評価したからこそ、人間相互の社会的関係である「価値」の中に「労働」を見出す労働価値論を拒否したのである。

しかし、こうしたフォイエルバッハ的疎外論は、現実の市民社会を把握するための枠組みとして決定的な困難を持っていた。労働価値論の拒否はその端的な表れであるが、それ以上に大きな問題が、交換価値と貨幣という市場経済における社会的関係の考察において現れることになる。

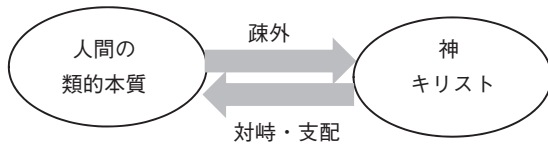
というのも、フォイエルバッハ的疎外論は、もともと個別的（あるいは代表単数的に存在する）人間とその本性から神やキリストを概念的に把握するために用いられる社会認識のフレームである。問題は人間と神の関係であって、疎外された神やキリスト相互の関係ではない。そもそも唯一者としての神やキリストは他者との社会的関係を取り結ぶことはないのである。

ところが、「疎外された労働」としての私的所有は現実の市民社会の中で人間と人間を取り結ぶ「紐帯」となっていて、現実の人間の間での社会的関係を担っている。「疎外」論的把握によって「世界との関連を中断した」人間しか描き出せないフォイエルバッハの論理では、人間と神との直線的な対立・対抗関係は描写できても、現実の人間相互の社会的関係である「交換」を把握することができないのである。図2に示した丸四角で囲われた部分は疎外論では展開できない課題である。

この困難が集中的に現れているのが、「ミル評注」における「交換」さらには「価値」と「貨幣」の分析である。従来指摘されているように、この著述の大きな特徴は、労働価値論を用いることなしに、後の価値（形態）の分析に通じるような交換と貨幣の考察がすでに行われる点にある。こうした考察は1844年の段階で突然現れたものではない。先に述べたように、これらは労働価値論に接する以前から形成されていた「紐帯」論の延長線上に展開されている。「紐帯」概念によって示されるマルクスの関心は、社会内部での個別的な人間の社会的紐帯、つまり諸個人を相互に結び付ける社会的媒介様式の解明であり、この概念によって市民社会における「貨幣」という紐帯を描写しようとする試みをすでに『ユダヤ人問題に寄せて』の時点で行っている。

しかし、疎外論を用いる限り、疎外された労働としての「私的所有」から、さらにその媒介者（疎外体？）である貨幣を位置付けられなければならない。マルクスは、この新しい課題にうまく対処することができなかった。前稿で述べたように、彼は二重の疎外という論理を用いることで貨幣を展開しようとするが、疎外されたものがさらにその本質を疎外するという論理

【疎外論的キリスト教批判】



【類的本質としての労働から私的所有および貨幣の把握】

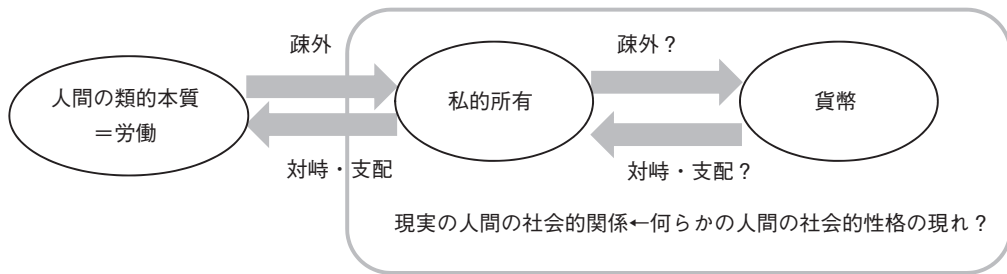


図 2. 疎外論の構造と、交換関係把握の困難

を整合的に展開することは無理であった。

私的所有（商品）と貨幣の関係をうまく展開できない以上に大きな問題となったのは、交換に現れる人間の社会的な性格をどのように理解するかという問題であった。疎外論を用いる限り、商品の交換や貨幣は本来の人間の本質を失った「非本質的な紐帯」である。しかし、交換は言うまでもなく現実の人間の社会的関係であり、人間の必要によって営まれる社会的な営みである。そうである以上、そこには何らかの意味での人間相互の社会的な性格が示されている。フォイエルバッハは「疎外」によって現実の人間の社会的性格を否定し、世界との関連を中断した人間の姿を描き出した。ところが、「疎外された労働」としての私的所有の交換はそれ自体が社会的な行為であり、現実の人間相互を結びつけている社会的な関係である。

「ミル評注」におけるマルクスは、交換それ自体が実際に人間の社会的な関係として生まれ、何らかの意味での人間の社会性の表現であり、「疎外」とは相いれない「社会的な行為、類的行為、共同存在」として認めざるをえない段階に進んでいる（前掲の図1の※印参照）。人間の社会的性格は市民社会（資本主義社会）においても失われていないのであり、現実の交換において人間は相互に「世界との関連を中断」していない。しかし、交換の内部に示される人間の社会的性格を「共同的存在」であり「類的行為」として認めながらも、「疎外」論を用いているために、交換や貨幣を「非本質的」な「社会的関係の反対物」として位置付けざるをえない。交換に表現される人間の社会的性格と、疎外によって社会との関連を中断した人間の姿を整合的に展開することは非常に困難であることが「ミル評注」における叙述に現れている（図1中の黒い矢印 ←→ 参照）。

ここにおいてフォイエルバッハ的「疎外」論を用いることの限界は明確にならざるをえなかった。本来、人間と神、人間とキリストの関係を解明するために用いられていたフォイエルバッハ的疎外論は、人間相互の現実の社会的関係である「交換」を考察するための論理として適用できるものではなかったのである。「交換」、「貨幣」という現実的な社会的関係に示される人間の社会的、あるいは類的性質（これは資本主義社会においても消えずに貫徹する）を、人間の本質としての「労働」から説明するためには、「疎外」に代わる新しい社会認識のフレームを必要とする段階にマルクスは進んでいた。

3. 「人間の本質」としての「生産力」概念

こうした困難に直面したマルクスは、『経哲草稿』を文字通り「草稿」のまま放置することになった。そして、フォイエルバッハ的疎外論の批判的克服に着手することになる。1844年段階での熱狂的な礼賛と支持とは打って変わって、フォイエルバッハへの執拗な批判が「フォイエルバッハにかんするテーゼ」から『ドイツ・イデオロギー』にかけて繰り返し行われていくことになる。

まず、マルクスによる批判は極めて端的であり、フォイエルバッハの疎外論では現実の社会的な関係が把握できないという点に集中して繰り返される。

「フォイエルバッハにかんするテーゼ」においては、テーゼ7では「フォイエルバッハは、…彼が分析する抽象的個人が或る特定の社会的形態に属することを見ない」と述べ、それに続けてテーゼ10で「新しい唯物論の立場は人間的な社会もしくは社会的な人類である」⁷⁾としている。

現実的な社会的関係を把握することができない、つまり市民社会における現実の経済的関係を把握できないというフォイエルバッハ疎外論の大きな欠陥に対する批判は、『ドイツ・イデオロギー』においても引き続き繰り返されていく。

「人間どうしの関係にかんするフォイエルバッハの推論のこともしくは結局、人間たちはお互いを必要とするし、またいつも必要としてきたことの証明に尽きる」⁸⁾のであり、「彼は『人間の人間にたいする』『人間的関係』としては愛と友情、しかも観念的に美化された愛と友情をしか知らない」⁹⁾。それゆえ、「人間を彼らの与えられた社会的連関の中でつかむことをせず、彼らを現にあるごときものに仕上げた彼らの当面の生活諸条件のもとでつかむことをしないの

7) カール・マルクス、「フォイエルバッハにかんするテーゼ」、『マルクス・エンゲルス全集』第3巻 大月書店 P.5, Marx Engels Werke 3 S.7

8) カール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、『マルクス・エンゲルス全集』第3巻 大月書店 P.38, Marx Engels Werke 3 S.42

9) 同上 P.40-41, S.44

で、現実的に存在し活動している人間にフォイエルバッハが到達するときはな¹⁰⁾いのである。

現実の社会的な関係にまったく接近することができないというフォイエルバッハの疎外論がもつ難点は、何に由来するのか。マルクスの批判は、フォイエルバッハが想定する「人間の本性」あるいは、「類」の把握の仕方に根源的な問題があることを指摘している。すでに引用した通り、フォイエルバッハにとっての人間関係とは愛や友情以上のものではなく、現実の人間相互の関係から乖離しているという点では、「感性的」というより「観念的」なものに過ぎない。

さらに言えば、こうした類的な本質の把握においては、「人間性是一個の個人に内在する抽象物」¹¹⁾であり、「内なる、無言の、多数個人を自然的に結び合わせる普遍性としてのみとらえられうる」¹²⁾。そこにおける人間性は「『人間なるもの』という抽象物」¹³⁾あるいは「観念的な『類の中での平均化』」¹⁴⁾でしかない。こうした「個体の特定の生存状態」¹⁵⁾という次元で把握された人間性からは、「せいぜい感覚のなかの『現実的な、個人的な、生身の人間』を認めるにいたるのが関の山」¹⁶⁾であって、現実の人間相互の社会的関係は把握できないのである。

しかし、こうしたマルクスの批判は、疎外論を用いていた『経哲草稿』段階でのマルクス自身の「労働」把握にもそのままあてはまるものだった。すでに述べたように、マルクスは『経哲草稿』の段階において、人間の本質を「労働」として把握する段階に進んでいる。ただし、そこでの労働概念は「人間を直接に動物的生活活動から区別する」¹⁷⁾という次元に設定され、個別的に存在する人間の活動からの代表単数的な抽象物として把握されている。確かにすでに、1844年の段階においても類的本質を人間の活動とすることによって、感性ではなく実践的な活動として類存在をとらえているという点では、すでにフォイエルバッハの類的本質概念を部分的には批判的に克服している。しかし、それでも人間と自然との直接的関係の中における「対象世界の加工」として類的本質が認識されている。

つまり、端的に言えば、「疎外された労働」として展開されている「労働」は何らの社会的な規定性をもっていない。疎外されている「労働」は対自然との関係において、すなわち個別的な人間の活動の次元において把握されたものである。つまり、「個体の特定の生存状態」

10) P.41

11) 前掲「フォイエルバッハにかんするテーゼ」, P.4, S.6

12) 同上

13) 前掲『ドイツ・イデオロギー』, P.41, S.44

14) 同上, P.41, S.45

15) 同上, P.38, S.42 (強調は引用者)

16) 同上, P.41, S.44

17) カール・マルクス「一八四四年の経済学・哲学手稿」『マルクス・エンゲルス全集』第40巻 大月書店 P.437, MEGA Band I /2 S.369

「個体の『本質』¹⁸⁾ から把握されたものであって、人間相互の関係、社会的関係の次元では把握されていない。この点では、後にマルクス自身がフォイエルバッハ批判として繰り返し述べる「本質」と同じ次元にある。

こうした労働概念の把握は、当時のマルクスがフォイエルバッハ的疎外論を使用していたことからの裏返しとして必然的に生じている。というのも、神あるいはキリストと人間関係を把握するための宗教的疎外論においては、「人間性」あるいは「類」の把握には「内なる、無言の、多数個人を自然的に結び合わせる普遍性」¹⁹⁾ 以上のものを必要としないからである。むしろ、マルクス自身が疎外論を自らの論として使用していたからこそ、こうした人間性の把握がかかえる問題点を『ドイツ・イデオロギー』の段階で根本的に批判することができたと考えられる。そもそも「疎外」は、現実の人間相互の社会性の喪失を描き出すための概念なのだから、「疎外」されることになる労働は社会的性格を前提とした概念ではないのである。

そして、かつての自分の「疎外論」への反省を含めたフォイエルバッハへの批判を通じて、マルクスの社会把握の方法は決定的な発展を経験することになる。この変化もまた先の4つの思考軸の延長線上に生じている。そこにおいて、中心になったのは「人間の本質」、つまりは「労働概念」についての彼の認識の変化であった。

「フォイエルバッハにかんするテーゼ」のテーゼ6において「その現実性においてはそれ(人間性—引用者)は社会的諸関係の総体(ensemble)である」²⁰⁾ という有名な叙述に表明されたとおり、人間性、あるいは人間の本質を「社会的諸関係の総体」として把握する段階へとマルクスは進んでいくことになった。

この「社会的関係の総体」という言葉はそれ自体が意味深長であり、実際これまで多様な解釈が行われてきた。起点となったフォイエルバッハ的疎外論の問題点は、個体として、代表単数的に抽象された人間から出発するために、現実な社会的関係を十分に展開できないことにあった。マルクスは、こうした疎外論的社会認識の限界を乗り越える為に、「人間の本性」である労働概念自体を「社会的諸関係の総体」として把握し直すことになる。『経哲草稿』段階における疎外された労働を展開する段階で、すでにマルクスは「人間の本質」を「労働」として把握していた。しかし、それは代表単数的な「人間なるもの」から抽象された労働概念であり、それ自体に社会的な規定性は含まれていなかったことはすでに述べた。しかし、労働は人間を動物から区別する特徴、代表単数的な「人間なるもの」から抽象された次元のものではない。それ自体が社会的な関係の中で営まれるものであり、現実の人間の日々の「社会的」な営みそのものである。

18) 前掲『ドイツ・イデオロギー』, P.38, S.42 (強調は引用者)

19) 前掲「フォイエルバッハにかんするテーゼ」, P.4, S.6

20) 前掲「フォイエルバッハにかんするテーゼ」P.4, S.6

それゆえ、労働が「社会的諸関係」の次元において把握し直され、社会的な意味を包含する「労働」概念へと発展していくことになったのである。つまり、『経済学・哲学草稿』段階では「人間の本質」として把握された労働概念は、フォイエルバッハ批判を通じて「社会的関係の本質」へと昇華されることになった。

社会的な次元において再措定された類的本質としての「労働」概念、これが「生産（諸）力」である。『経哲草稿』における対自然的な「労働」あるいは生産活動に代わって、この「生産力」がマルクスの社会認識の中心軸に位置付けられることになる。「人間の本質」という軸上で見れば、『経哲草稿』段階の労働概念が、『ドイツ・イデオロギー』段階での「生産力」へと発展的に変化していることがわかる。両者は明らかに連続している。

マルクスは述べる。「生産諸力、諸資本および社会的諸交通形態のこの総体（Summe）は哲学者たちが『実体』とか『人間の本質』とかとして表象してきたもの、彼らが祭りあげたり叩いたりしてきたものの実在的な根拠なので」²¹⁾ ある。

そして、自然的な属性としての労働概念に、社会的な性格を加えることによって、「生産力」という概念が生み出されることになる。この生産力については次のように述べられている。「労働における自己の生の生産にしても、生殖における他人の生の生産にしても、およそ生の生産なるものはとりもなおさず或る二重の関係として— 一面では自然的関係として、他面では社会的関係として— 現れる。ここで社会的というのは、どのような条件のもとであれ、とにかく幾人かの諸個人の協働（Zusammenwirken）という意味である。したがって、或る特定の生産様式または工業的段階はつねに或る協働の様式または社会的段階と結びついているということ、—そしてこの協働の様式はそれ自体、ひとつの『生産力』である、— 一人間たちの利用する生産力の総体（Menge）は社会的状態を条件づけ」ることになる²²⁾。さらに別の個所では、「生産力の或る総量（Summe）、或る歴史的に作られた対自然の関係と対個人相互間の関係」²³⁾とマルクスは述べている。

このように、『経哲草稿』の段階では「自然的関係」、あるいは「対自然」として把握された「労働」概念は、ここに「社会的関係」や「対個人相互間の関係」という側面を加えた「二重の関係」として捉えなおされることになった。これが「生産力」という概念である。すなわち、対自然的な労働概念は、社会的関係を含むものとして「生産力」概念に発展的に変化することになった。

『経哲草稿』における「労働」概念が、『ドイツ・イデオロギー』における「生産力」の概念に変化していったことは、以下のような叙述からも傍証することができる。

21) 同上, P.34, S.38

22) 同上, P.25, S.29-30（下線は引用者、以下同様）

23) 同上, P.34, S.38

「生産力は諸個人からまったく独立の、もぎはなされたあり方で諸個人とならぶ一つの独自の世界として現われる。…かくて一方の側に生産力の或る全体 (Totalität) が存在し、このものはいわば一つの物的な姿をとってきていて、諸個人はもはや彼の力であるのではなくて、私的所有の力 [なのであり]、それゆえに私的所有者であるかぎりでのみ諸個人の力なのである。…いま一方の側にはこの生産力に対立している大多数の個人がいる。これらの人々は生産力をその手からもぎはなされており、したがって現実的生活内容を奪われて抽象的な個人となっている」。²⁴⁾

ここで述べられている、私的所有が大多数の個人に疎遠なものとして対立するという論理は「疎外された労働」から発展してきたことは明らかである。しかし、諸個人に対立するものは単なる労働ではなく「生産力」である。しかも、ここではもはや「疎外」という概念把握のフレームは使われていない。マルクスは疎外論を使わずに、私的所有と諸個人の疎遠な対抗関係という市民社会的な矛盾を描き出そうとする段階²⁵⁾に進んでいる。

そして、こうした生産力の独立化の『原因・根拠』を考察するための論理は、社会的関係を含むものとして、単なる「疎外論」的な方法よりも手の込んだ論理になっている。次章で詳しく見るように、『ドイツ・イデオロギー』段階において、生産力が自立化する根拠は、労働をめぐる人間相互の社会的な関係としての「分業」=「(社会的な)労働の分割」の歴史的な発展というより精緻な論理によって展開される。つまり、この生産力概念を出発点として、「人間たちの利用しうる生産力の総体 (Menge) は社会的状態を条件づけ、したがって『人類の歴史』は常に工業および交換の歴史的なつながりの中で研究され論じられなければならない」²⁶⁾のであり、「人間相互間の一つの唯物論的なつながり…—このつながりはつねに新しい諸形態をとり、このようにして一つの『歴史』を提示している」とする。社会的次元で労働を把握しなおすことによって概念規定された「生産力」を社会認識の中心に据えることによって、その段階的な発展に応じた「生産関係」によって社会を把握する方法、すなわちよく知られた史的唯物論、あるいは唯物論的弁証法がここに確立されることになる。

4. 分業論の展開と史的唯物論の形成

生産力概念を社会把握の中心に据えたマルクスは「一民族の生産力 (Produktionskräfte einer Nation) がどれほど発展しているかをもっとも歴然と示すものは、分業 (Teilung der

24) 同上, P.63, S.67

25) これを疎外論から物象化論への変化と呼びうるかどうかはさらなる検討を要する問題であるので、ここでは即断を避けておきたい。ただ、疎外論から物象化論への移行という廣松渉氏の解釈 (廣松渉 [1983]) は十分な考慮に値すると筆者は考えている。

26) 同上, P.25-26, S.30

Arbeit = 労働の分割—引用者)の発展程度である」²⁷⁾として、生産力の発展を「労働の分割」の程度によって描こうとする。「市民社会」は、こうした分業の程度に応じてとられる「生産関係」の一つとして位置付けられることになる。市民社会において生産力が大多数の個人に対立した疎遠なものとして独立するという事態も「労働の分割」から説明される。その論理は以下のようなものである。

「自然発生的」に社会内での分業が進むにつれて、「各人は自分に押しつけられるなにか特定の排他的な活動範囲をもつことになり」、個人の社会的な活動は「固定化」²⁸⁾されることになる。そのため、分業が拡大していく中で、社会の「自生的排他性」²⁹⁾はぶち壊されて、固定化された諸活動は相互に依存するようになる。「労働の分割によって必須となったさまざまな個人の協働によって」生産力は「幾層倍」³⁰⁾にも拡大するのであるが、それと同時に諸個人は「分業のもとへ包括され」ることによって、「お互いにすっかりもたれ合うという状態におかれ」³¹⁾ることになる。つまり、分業の拡大によって協働 (Zusammenwirken) の範囲が広がり、諸個人の相互依存性が深まっていく。

そして、こうした労働の分割とともに私的所有が発展する。「労働の分割ということばと私的所有ということばは同じことを言っているのであって、— 一方がはたらきにかんして言っていることを、他方がはたらきの産物にかんして言っているだけのことである」³²⁾。それゆえ、この分業の程度が所有の形態を規定し、そうした所有のもとで営まれることになる「生産関係」のあり方を決定づけることになる。「ちょうど労働の分割のさまざまな発展段階の数だけ所有のさまざまな形態がある。ということは、労働の分割のその都度都度の段階は…諸個人相互間の間柄をも規定する」³³⁾のであり、「これらのさまざまな形態はそれだけのかずの労働の組織の、したがって所有の、形態である」³⁴⁾。

市民社会としての資本主義社会はこうした生産関係のひとつであり、分業の発展段階の中で「とことんまで広げられた分業」³⁵⁾を特徴としている。「個々の個人の世界史的なものへの活動の広がりにもなって」分業の範囲は世界的な規模にまで発展し、「諸個人の世界史的協働」の結果として、人々は世界的なレベルで「全面的依存」³⁶⁾した状態になる。

27) 同上, P.17, S.21-22

28) 同上, P.29, S.33

29) 同上, P.56, S.60

30) 同上, P.30, S.34

31) 同上, P.62, S.66

32) 同上, P.28, S.32

33) 同上, P.18, S.22

34) 同上, P.57, S.61

35) 同上, P.55, S.59

36) 以上, 同上, P.33

しかし、分業の発展によって拡大する協働は「自由意志的ではなく、自然発生的」なので、私的所有のもとで営まれる。それゆえ、「彼ら自身の統一された力としては現れないで、何か疎遠な、彼らの外にある強制力として現われる」³⁷⁾ ことになる。「労働を分担する諸個人の相互的依存性として存在する」「共同の利益」と私的所有の「特殊な利益」の「分裂」が発生し、それは「彼にとって或るよそよそしい対立する力となり、彼がそれを支配する代わりにそれが彼を抑圧する」³⁸⁾ という関係を生み出すことになる。

というのも、人間の本质である「生産力」は人間の「社会的な力」³⁹⁾ であり、それは協働と諸個人の相互的依存性のもとにある。しかし、そうした社会的な力は、労働の分割、すなわち私的所有のもとで分割されて営まれる生産関係の中で発展していく。それゆえ、「諸個人はばらばらでありながら、労働の分割のせいで結ばれねばならず、しかも彼らのばらばら状態のおかげでその結合は彼らとは無縁なきずな (Band) となってい」⁴⁰⁾ くことになる。この「彼らとは無縁なきずな (Band = 紐帯)」が「貨幣」である。

分業がまだ発展しきっていない段階では、「家族であれ部族であれ土地そのもの等々であれなんらかのきずな (Band)」が見られるのにたいして、高度に発展した分業の段階では「諸個人は相互に独立していて、ただ交換によってのみいっしょにされる」ことになる。それゆえ、「貨幣という何か第三のものにおいて一つの物的形態を」⁴¹⁾ とって「人間的な力 (関係) の物的なそれへの転化」⁴²⁾ が生じるのである。

初期マルクスに関するこれまで一連の拙稿で考察してきたとおり、マルクスにおける貨幣、さらに交換の考察は「紐帯」論として継続的に発展してきた。私的所有のもとでの生産関係において、分割された労働を媒介する「紐帯」が貨幣なのであり、それが生産力という「社会的な力」さらには「人間的な力 (関係)」をその物的な形態において表現する。それによって、諸個人から疎遠なものとして独立することになる。すなわち、「貨幣はある一定の生産関係および交通関係の必然的産物」⁴³⁾ なのであり、私的所有のもとで営まれる生産関係の必然的産物として「貨幣」は位置付けられることになる。唯物史観を使うことによってマルクスは、人間労働の本来的な社会性 (協働と相互依存) を含む「生産力」と、高度な分業の発展段階に対応した私的所有によって分断された人間をつなぐ疎遠な紐帯である貨幣という「生産関係」を整合的に位置付けることができたのである。

37) 同上, P.30, S.34

38) 同上, P.29, S.33

39) 同上, P.30, S.34

40) 同上, P.71, S.75

41) 以上, 同上, P.61, S.65

42) 同上, P.70, S.74

43) 同上, P.197, S.184

これまでの考察をまとめると、分業論を中心とした『ドイツ・イデオロギー』段階の史的唯物論の構造は以下ようになる。

労働の分割（＝分業）の拡大によって協働の範囲は世界的な規模で広がり、それにともなって諸個人の相互的依存性も高度に発展する。そして、この「協働」と「相互依存」の拡大によって、労働の社会的な力である「生産力」も巨大化する。ところが、分業の発展は私的所有の発展であり、自然発生的な労働の分割によって諸個人は私的所有に分断されたばらばらの状態で活動を行っている。それゆえ、社会内部での協業によって相互に依存している諸個人の社会的性格は私的所有の交換によって実現され、貨幣という物的な紐帯によって結ばれることになる。労働の社会的性格である生産力は、貨幣という諸個人から疎遠で独立した物的形態という生産関係をとって自立化することになる。

5. 唯物史観の形成と労働価値論の受容

この史的唯物論的な社会把握の方法によって、労働価値論を受容するための理論的土台が構築されることになった。唯物史観によって、「労働」の社会的な全体としての「生産力」と、その一定の発展段階においてとられる「生産関係」としての「価値」、あるいは「貨幣」として両者は結び付けられることになったのである。

「生産力」として捉えられたのは労働の社会性であり、分業の範囲とともに広がる「協業」と「相互依存性」である。「人間の本質」を示す「社会的関係の総体」とは、社会そのものを労働の有機的全体として捉えたものであり、こうした労働の社会的性格、つまり「協業」的なあり方と「相互依存性」は、市民社会においても失われぬ。それどころか、これらを世界的な規模にまで拡大させ、それによって生産力の巨大化をもたらすのが市民社会なのである。

そして、労働の有機的全体としての社会は、それが「分割」された各段階に対応した生産関係をとる。市民社会は、世界的な分業の拡大によって生産力は飛躍的に増大し、「協業」と「相互依存性」の範囲も世界的なレベルに拡大する。しかし、その生産力は私的所有によって分割された「生産関係」のもとで営まれるので、その「社会性」つまり協働と相互依存性のもとにある諸個人を結ぶ紐帯として「貨幣」という生産関係が必要とされる。

『経哲草稿』段階では、疎外論的社会把握によって人間の類の本質である「労働」が疎外されているのだから人間の社会的関係の中には労働概念は入らないとする論(労働価値論の拒否)がとられていた。しかしながら、今や『ドイツ・イデオロギー』段階では、生産力と生産関係という史的唯物論による社会認識の方法的枠組みが形成された結果として、人間の類的・社会的本質である「労働」は、「貨幣」という物的な形態において市民社会の中にも貫徹するという論(労働価値論の受容)に進むことができた。唯物史観を用いることによって、「労働」(生産力)と、価値＝貨幣(生産関係)を結びつけることができるようになったのである⁴⁴⁾。

すでに「ミル評注」の段階で、マルクスは交換自体を人間相互の社会性を示すものとして把握していた。しかし、そうした人間の社会性は、対自然的関係の中で個として労働する人間の姿と、そこから展開される疎外論からは描き出せないものであった。むしろ、こうした社会把握の方法では、社会から疎外され、世界との関係を中断した人間の姿が描き出される。しかし、唯物史観の形成によって、労働の社会的な規定性を含む「生産力」概念を論の出発点とすることで、その一定の発展段階に応じた「生産関係」として貨幣が位置付けられる。そして、この新しい社会関係把握の方法によって、労働の社会的性格が「貨幣」という生産関係のなかに貫徹することになるのである。生産力と、その一定の段階における生産関係というマルクスの唯物論的的社会把握の方法と、労働価値論の受容は表裏一体の関係にある。

従来、『ドイツ・イデオロギー』では、労働価値論の明確な受容は見られないとされてきた。後段で現れる「硬貨 (Metallgeld) はまったくただ生産費、すなわち労働によって規定されている」⁴⁵⁾ という叙述をマルクスが労働価値論を受容したことの証拠としてあげる論者もいるが、もちろんこの叙述だけをもって労働価値論を受容したと断定することはできない。しかし、マルクスの社会把握の方法の発展段階は、労働価値論を受容するのに十分な段階に至っていることを本稿の考察は示している。

ただし、『ドイツ・イデオロギー』段階では労働価値論を受容する理論的な基盤が形成されたにすぎない。多くの論者が指摘する通り、交換と貨幣の関係はほとんど言及されていないし、なによりも交換や貨幣、さらには資本との関係については不明確なまま残されている。史的唯物論という土台の上に批判的に摂取され、マルクス独自の社会認識である史的唯物論を表現し、彼固有の経済学体系の礎石となるような独自の労働価値論を厳密に定式化するのにはなお多くの時間が必要とされていた。

6. おわりに

本稿の最初に述べたように、初期マルクスにおける労働価値論の拒否から受容への転換は、マルクス自身の社会把握の方法の発展的变化に規定されている。その転換の鍵になったのは、『経哲草稿』段階での疎外論に替わって、『ドイツ・イデオロギー』段階では史的唯物論という

✓ 44) マルクスの労働価値論が、もともと商品の「貨幣」的性格から展開され、「交換価値」と「価値」がかなり後まで未分化のままであったことはすでに指摘した (大澤健 [1997])。マルクスの価値形態論は、「交換価値」という社会関係的な概念から、商品固有の「価値」概念を分離することによって形成されており、その逆ではない。諸個人を結ぶ社会的な関係としての「紐帯論」として「貨幣」の考察が形成され、価値概念が最初から社会的な関係概念であることから「交換価値」と「価値」の未分化という事態がかなり後まで残ったと考えられる。

45) 同上, P.430, S.383

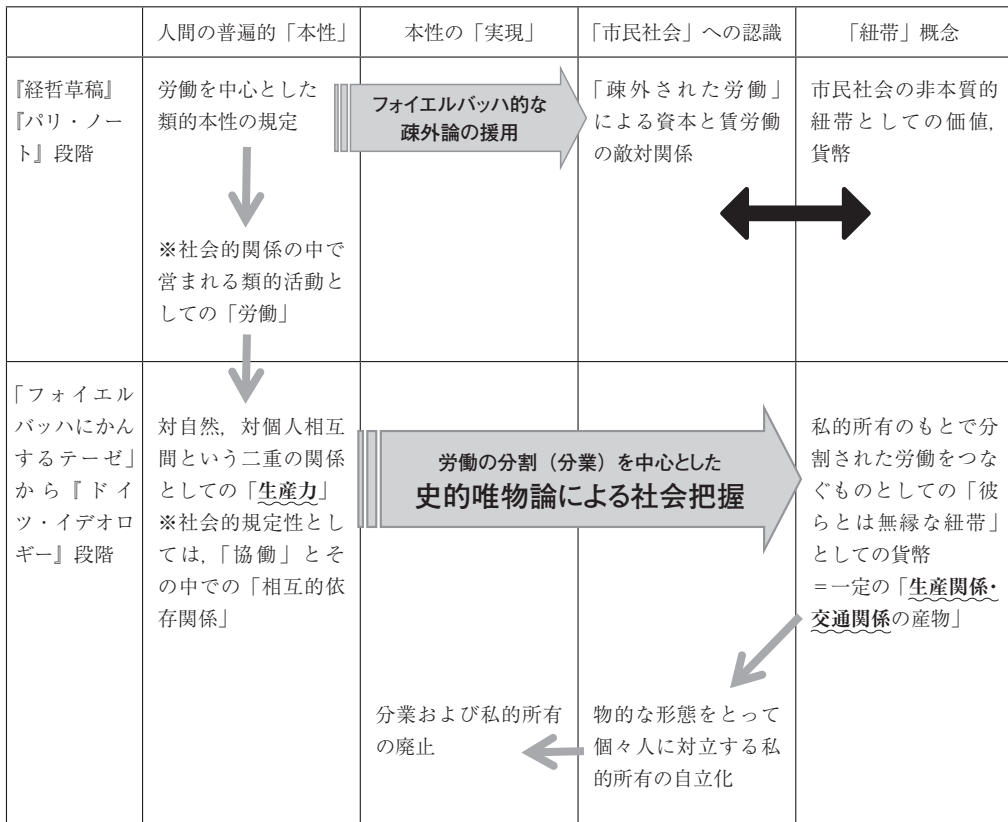


図3. 『ドイツ・イデオロギー』段階での社会把握の方法の発展

社会把握の方法が形成されたことである。それは最初期から続く4つの思考軸の発展的な相互作用によって形作られたものであり、古典派経済学の諸範疇と理論はその中に批判的に攝取されて位置づけられることになった。先にあげた図に、『ドイツ・イデオロギー』段階のマルクスの社会把握を位置付けると以下ようになる（図3）。

『経哲草稿』段階で人間の本質として把握された「労働」概念は、『ドイツ・イデオロギー』段階では社会的な規定性のもとに捉えなおされて「生産力」概念へと成長していった。「社会的」というのは、どのような仕方においてであれ、…ともかく幾人かの諸個人の協働という意味であり、分業の発展による「協働」の広がりや諸個人の「相互的依存関係」のことを指している。交換において表現されている労働そのものの社会的性格—「人間の社会的行為、類的行為、共同存在」—はすでに「ミル評注」段階で展開されていたが、『ドイツ・イデオロギー』において社会的な協働と、そのもとでの諸個人の相互依存という「生産力の総体」として把握される。

市民社会は分業＝労働の分割が世界レベルにまで高度に発展した社会であり、「協業」の範囲を拡大することで生産力を飛躍的に増大させる。しかし、それは同時に私的所有という所有

形態をとり、私的所有という一定の生産関係の中で営まれる。私的所有に分断された「社会的な力」は、貨幣という「彼らとは無縁なきずな (Band = 紐帯)」によって結ばれることになる。そうであればこそ、貨幣は「一定の生産関係、交通関係の必然的産物」なのであり、それが彼らから独立の存在として自立化することになる。

人間的な力（関係）は貨幣という物的なそれへと転化させるのは、「自由に結合した諸個人の全体的計画にしたがったものではない」「自然発生的に行われる」⁴⁶⁾ 分業＝労働の分割であり、これが私的所有を諸個人から疎遠なものとして独立させる。それゆえ、人間の本性は、労働の分割と私的所有の廃止によって「実現」されるという共産主義的な命題として確立されることになる。

『ドイツ・イデオロギー』における分業を中心とした史的唯物論の論理構成が後のマルクスの経済体系にまで保持されているかどうかを判断することは本稿の課題ではない。唯物史観は『ドイツ・イデオロギー』において生まれたばかりであり、諸範疇は概念的にまだまだ不明確・不明瞭な点も多く、確固とした決定的な歴史観として確立されているわけではない。少なくとも分業や私的所有といった体系構成上も重要な範疇の概念規定は、当然後の段階で修正や精確化される必要があった。

マルクスの後の経済学批判体系プランにおいて特に問題となるのは、「分業」の体系的な位置づけである。『ドイツ・イデオロギー』段階では、分業が生産力と生産関係の結節となっており、体系的に端緒的な役割を果たしている。『経済学批判要綱』におけるプランを見る限り、「分業」が体系的な端緒あるいは礎石であるという考え方はかなりあとまで保持されていると推察できる。しかし、現行の『資本論』を見る限り、彼独自の経済学体系の端緒範疇として「分業」をおく考え方は最終的に決別している。経済学体系の端緒として何を選択するのかという点は変化しているが、『ドイツ・イデオロギー』段階で展開される基本的なモチーフは労働価値論を展開する場合の基本的な前提として後の段階まで保持されていると考えられる。

本稿の課題は、マルクスの社会把握の方法の発展的な変化を跡付けることで史的唯物論の形成過程を明らかにすることとともに、それによって労働価値論をマルクスが受容することになったということを考察することにあつた。ただし、初期マルクスについての筆者の考察は、マルクスの理論形成過程の解明それ自体を目的とするというよりも、そこからマルクス経済学理論の独自性を明らかにすることに主眼がある。そうした意図からすれば、本稿の考察から得られる含意は極めて重要である。

というのも、唯物史観の確立によってマルクスが労働価値論を受容できたとするならば、マルクスの労働価値論は史的唯物論という社会把握の方法を強固な理論的前提を持っていると考える必要がある。つまり、労働価値論は唯物論的弁証法という社会把握の土台の上に批判的に

46) 同上, P.68, S.72

撰取されたのであり、そこで彼に固有の問題意識を表現するための独自の理論として展開されることになる。この点が、古典派とは大きく異なるマルクス労働価値論の特徴であると考えられる。それゆえ、逆に言えば、唯物史観を前提としなければ理解できないものとしてマルクス労働価値論の含意を解明する必要があるし、唯物史観を表現するための理論として解釈しなおさなければならない。これについての詳細を述べることを次稿の課題としたい。

引用・参考文献

- 遊部久蔵〔1963〕『『資本論』の成立— 一八四〇年代』『資本論講座1 “資本論”の成立 商品 貨幣』青木書店
- 有井行夫〔1987〕『マルクスの社会システム理論』有斐閣
- 石原博〔1987〕「1840年代マルクスのリカード評価—労働価値説の「受容」—をめぐって—」東北大学研究年報『経済学』第49巻1号
- 大島清〔1968〕『『資本論』への道』東京大学出版会
- 大澤健〔1997〕「価値形態論の成立過程とサミュエル・ベイリーの影響について」和歌山大学『経済理論』第277号
- 大澤健〔2003〕「初期マルクスにおける労働価値論以前の労働価値論の形成過程」研究年報『経済学』（東北大学）第64巻4号
- 大澤健〔2014〕「初期マルクスにおける労働価値論の拒否について」和歌山大学『経済理論』第377号
- 重田晃一〔1959〕「初期マルクスの一考察—経済学批判への端緒としての「ジェームズ・ミル評註」を中心として—」『関西大学経済論集』第8巻6号
- 重田晃一〔1967〕「労働疎外論と唯物史観—『経済学・哲学手稿』から『ドイツ・イデオロギー』へ—」経済学史学会編『『資本論』の成立』所収 岩波書店
- 重田晃一〔1979〕「第1部 マルクス経済学の生成 第1章 1840年代」遊部久蔵・杉原四郎編『講座経済学史Ⅲ マルクス経済学の生成と確立』所収 同文館
- 武田信照〔1980〕「初期マルクスの貨幣認識」愛知大学『法経論集 経済・経営篇Ⅰ』第92号
- 竹永進〔1979〕「四十年代マルクスの価値論の性格」中央大学『経済学論纂』第20巻1・2号
- ヴァルター・トゥーフシェラー〔1974〕『初期マルクスの経済理論 資本論成立前史（上）』宇佐美誠次郎他訳 民衆社
- 中川弘〔1997〕『マルクス・エンゲルスの思想形成』創風社
- 橋本直樹〔1979〕「『経済学批判』の端緒的形成—《パリ草稿》における「私的所有」—批判」福島大学『商学論集』第48巻2号
- 橋本直樹〔1981〕「経済学批判と疎外=物神性論—経済学的諸関係=諸範疇の転倒（Quidproquo）の構造—」中川弘編『講座資本論の研究 第1巻 資本論の形成』所収
- 廣松渉〔1984〕『増補 マルクス主義の成立過程』至誠堂
- 廣松渉〔1983〕『物象化論の構図』岩波書店
- L. フォイエルバッハ〔1975〕『キリスト教の本質（上）』『フォイエルバッハ全集』第9巻、船山信一訳 福村出版
- 細見英〔1970〕『『経哲草稿』第一草稿の執筆順序—N.I. ラーピン論文の紹介—』『立命館経済学』第19巻第3号
- マルクーゼ〔1973〕『初期マルクス研究 『経済学=哲学手稿』における疎外論』良知力・池田優共訳 未来社
- E. マンデル〔1971〕『カール・マルクス』山内昶・表三郎訳 河出書房新社
- L. ミーク〔1957〕『労働価値論史研究』水田洋・宮本義男訳 日本評論社

- ヴォルフガング・ヤーン [1958] 「マルクスの初期の著作における労働の疎外概念の経済的内容」 国際資料 1958年3・4月号
- 吉沢芳樹 [1970] 「マルクスにおけるリカード理論の発見と批判——一八四〇年代を中心に——」 専修大学社会科学研究所 社会科学年報 第4号
- ニコライ・I. ラーピン [1971] 「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」 細見英訳 『思想』 1971年3月号
- ローゼンベルグ [1971] 『初期マルクス経済学説の形成』 副島種典訳 大月書店

Why Did the Young Karl Marx Accept the “Value Theory of Labor”?

Takeshi OSAWA

Abstract

This paper attempts to explain why Karl Marx accepted the “value theory of labor,” having rejected the theory at the beginning of his long study of economics. He had rejected the theory because he was using the “alienation” framework, which is not appropriate for describing the exchange process and money. He developed his own framework of “historical materialism” to supersede the former one. The new framework describes human history through the relationship between productive power and a way of production. It meant that Marx was able to accept the “value theory of labor” because “labor” as productive power and “value” as a way of production could be combined in the framework.